

対談ちょこっとメモ

VulcaCAFE

今回対談をしたVulcaCAFEは、コーヒーとスイーツなどを楽しめます。



かなと思います。
渡邊 データの資産化は、非常に興味深いお話で、商業施設でもICTによる技術革新が進んでいますよね。
野口 精算などが無人化される時代が、いずれは来るだろうと思います。我々もレジを自動精算するセルフレジや、最終的なお金のやりとりのみを自動化したセルフを含めて、導入しておりますし、発注もAIが、自動的に発注するような仕組みを全店で導入しているところでは、人間が行う部分と、機械に任せる部分と、これを両方使いながら、いずれにしても省力化というところは、我々の業種の中では切っても切り離せない大きな課題だろうと思いますので、広義の意味でのICTの活用を、積極

的に進めるべき時代に入っているなど実感しています。それから商業施設におきましても、売り場でリアルにモノを販売するだけでなく、ネットを利用することで、その場に行かずとも非日常を体験できるということをやっている現状があり、コミュニティゾーンの5Gの活用には期待を寄せています。その反面、リアルな売り場にも、老若男女、世帯全員が集まるような仕掛けもしていくべきだと思っています。
新たな視点を取り入れたリディングプロジェクトが、府中天満屋プロジェクト！
渡邊 官民連携とICTのキーワードの2つを両方盛り込んでいるものが、府中天満屋であると思っています。特筆すべきところが3つあって、まず一つ目が、やはり立地です。まちなか駅そば、ランドマークという3つの惹かれるワードがそろっています。これだけで注目度がぐっと上がりま

す。それから二つ目は、これも野口社長が言われたコスト消費とモノ消費、やはり物を買うという消費行動もあるんですが、経験や時間を買うという視点を取り入れられているかがとても大事で、2つをどう融合していくのかが、これから一番期待される部分になると思っています。特に若い人は、携帯電話に月8千円支払うとか、物じゃなくて目に見えない時間だったり、経験だったり、それがいいと思ったらお金を使うというのは、やっぱり新しい消費行動ですね。そのようなことも今回の府中天満屋プロジェクトの中で、うまくミックスしていく点かなと思います。それから三つ目は、やはりまちなか、駅そばにありながら、広い駐車場があって、横には道の駅があってという拠点性です。民間施設で、市民の方が集まる魅力や必要性があって集まる場所が、拠点になるべきと私は思います。
府中天満屋プロジェクトへそれぞれの思いとは

府中天満屋コミュニティゾーン1期整備イメージ図



1期整備7月オープンは、ネウボラ、芝生広場、コワーキングスペース、多目的スペースが完成します。2期整備は、学びとチャレンジをコンセプトに、整備計画を練っています。

野口 施設の魅力を上げ、そこへ人が集まるそして、まちが少しでも元気になるという循環を作っていきたいと強く思います
今回、府中市と時間を掛けて協議を重ねた上で、スタートが切れたというのは、非常に良い関係の中で進められています。我々のような民間企業が自治体と一緒にやってやろうということには高いハードルがあつて、具現化する困難さを何度も感じてきました。我々としても、今回の改装の完成に向けて楽しみながらまた、期待感を持って進めています。商業施設は、コスト消費、時間を有効に活用する、あるいは、楽しむことを取り入れていくことが必須になっていきますが、コスト消費というのが、民間企業1社では、やれることが限られてしまっています。その魅力度を上げるのは、テナントであつたり、公の施設であつたりとの協力にあるわけです。まちなかの活性化は、地域の皆さんに喜ん



※画像はイメージです。



他市にある天満屋が手がけるショッピングセンターでは、今回の府中天満屋プロジェクトと同様に、公共施設と売り場が一体化することにより、相乗効果を生み出し、来客が数倍になったとの事例もあります。2階のコミュニティゾーンだけでなく、府中天満屋全体のリニューアルも進んでいます。

クトシティとして、進化するまちを目指すコンセプトです。事業の一つに、生活者向けのヘルスケアサービスの提供があります。生活者の方々がサービス利用データ連携を同意されることを基に、行政、大学、医療機関、ヘルスケアサービス企業、保険会社、生活用品メーカー、その他各社と連携し、生活者の方が暮らしやすい生活サービスにつなげていくというものです。
渡邊 昨今の都市インフラには、道路、下水道、公園などに加えて、今後は情報というものが加わっていくと思います。こういった世界の変革期には、ICTの進展で、ビジネスチャンスや新たな雇用が生まれてくるのではないのでしょうか。
小野 そうですね。地方と東京という関係性が変わってきている中で、コロナがさらにそれを加速しています。地方にいても、東京と同じような仕事ができ、世界ともつながっていく。ただ、それにはやはり情報インフラが必須になります。

この情報インフラの課題を解決すれば、地方にはいろんなビジネスが生まれる可能性はあると思います。今注目されている地方で仕事とバケーションをうまく融合しながら、仕事に取り組みワークションなどもあり、そういったニューノーマルな世界にも対応していきたいと思っています。
ICTで新しい発見やイノベーション
村田 今回の対談も、一部オンラインで行っています。ネットワークを介することによって、人と人とのつながり方や接し方が大きく変わってきています。対面で話していたのが、ICTを活用することによって、場所と時間の制約が、かなり柔軟性を持つようになり、要はいつでも、どこでもつながれるようになってきました。このところは、ぜひ活用していくところかなと思います。さらに、再利用という部分が、これからポイントになるのではと思います。それを可能にする

のが、データの資産化です。さまざまなやりとりの中で、そのまま消えてしまったものが、適切な形でちゃんと管理保管をしていくと、資産価値を生むのではないかと。例えば、ものづくりの匠の技術は、見て覚えたり、何年もかけて会得していくものですが、それを映像として撮影し、管理保存していくことで、資産として活用できたりします。そのことで、後継者の問題であるとか、技術の継承の問題を解消できたり、広まりといったところも、また新たに出てくるのではないかと思います。全てをデジタルにすればいいというものでもありませんが、この情報資産を、うまく活用しながら、新たな人との繋がりが、マッチングがより加速していくと、これまで思ってもみなかった新しい発見、気づきだとかイノベーションを生み、今は、コロナ対応で苦慮していますが、それを乗り越えて、生活が元通りになっていく中で、両方のいいとこどりをしていくべき